

Botchan Chapter 8 (Natsume Sōseki)

あか シャツに すす められて つり い かえ やまあらし うた だ な こと たね げしゆく で
赤シャツに勧められて釣に行った帰りから、山嵐を疑ぐり出した。無い事を種に下宿を出
ろと云われたときは、いよいよふらちな奴だと思つた。ところがかいぎの席では案に相違して滔々
と生徒厳罰論を述べたから、おや変だなと首を振つた。萩野の婆さんから、山嵐が、うらな
り君のために赤シャツと談判をしたと聞いた時は、それは感心だと手を拍つた。この様子で
はわかる者は山嵐じゃあるまい、赤シャツの方が曲ってるんで、好加減な邪推を 実しやかに、
しかも遠廻しに、おれの頭の中へ浸み込ましたのではあるまいかと迷つてる矢先へ、野芹川
の土手で、マドンナを連れて散歩なんかしている姿を見たから、それ以来赤シャツは曲者だ
と極めてしまった。曲者だか何だかよくは分らないが、ともかくも善い男 じゃない。表と
裏とは違つた男だ。人間は竹のように真直でなくっちゃ頼もしくない。真直なものは喧嘩を
しても心持ちがいい。赤シャツのようなやさしいのと、親切なのと、高尚なのと、琥珀のパ
イプとを自慢そうに見せびらかすのは油断が出来ない、めつたに喧嘩も出来ないと思つた。喧
嘩をしても、回向院の相撲のような心持ちのいい喧嘩は出来ないと思つた。そうなる
と一銭五厘の出入で控所全体を驚ろかした議論の相手の山嵐の方がはるかに人間らしい。会議
の時に金壺眼をぐりつかせて、おれを睨めた時は憎い奴だと思つたが、あとで考えると、
それも赤シャツのねちねちした猫撫声よりはましだ。実はあの会議が済んだあとで、よっぽど
仲直りをしようかと思つて、一こと二こと話しかけてみたが、野郎返事もしないで、まだ眼
を剥つてみせたから、こつちも腹が立つてそのままにしておいた。

いらいやまあらし おれと くち き つくえ うえ かえ いっせんごりん の
それ以来山嵐はおれと口を利かない。机の上へ返した一銭五厘はいまだに机の上に乗つて
いる。ほこりだらけになって乗っている。おれは無論手が出せない、山嵐は決して持つて帰ら
ない。この一銭五厘が二人の間の 障壁 になって、おれは話そうと思つても話せない、山嵐
は頑として黙つてる。おれと山嵐には一銭五厘が祟つた。しまいには学校へ出て一銭五厘を
見るのが苦になった。

ぜっこう すがた ひ か あか いぜん ざいらい かんけい
山嵐とおれが絶交の姿となつたに引き易えて、赤シャツとおれは依然として在来の関係を
保つて、交際をつづけている。野芹川で逢つた翌日などは、学校へ出ると第一番におれの傍
へ来て、君今度の下宿はいいですかのまたいっしょに露西亜文学を釣りに行こうじゃないか
のいろいろな事を話しかけた。おれは少々憎らしかつたから、昨夜は二返逢いましたね

と云ったら、ええ停車場で——君はいつでもあの時分出掛けるのですか、遅いじゃないかと云う。野芹川の土手でもお目に懸りましたねと喰らわしてやったら、いいえ僕はあっちへは行かない、湯には行って、すぐ帰ったと答えた。何もそんなに隠さないでもよかるう、現に逢てるんだ。よく嘘をつく男だ。これで中学の教頭が勤まるなら、おれなんか大学総長がつとまる。おれはこの時からいよいよ赤シャツを信用しなくなった。信用しない赤シャツとは口をきいて、感心している山嵐とは話をしない。世の中は随分妙なものだ。

ある日の事赤シャツがちょっと君に話があるから、僕のうちまで来てくれと云うから、惜しいと思ったが温泉行きを欠勤して四時頃出掛けて行った。赤シャツは一人ものだが、教頭だけに下宿はとくの昔に引き払って立派な玄関を構えている。家賃は九円五拾銭だそう。田舎へ来て九円五拾銭払えばこんな家へはいれるなら、おれも一つ奮発して、東京から清を呼び寄せて喜ばしてやろうと思ったくらいな玄関だ。頼むと云ったら、赤シャツの弟が取次に出て来た。この弟は学校で、おれに代数と算術を教わる至って出来のわるい子だ。その癖渡りものだから、生れ付いての田舎者よりも人が悪るい。

赤シャツに逢って用事を聞いてみると、大將例の琥珀のパイプで、きな臭い烟草をふかしながら、こんな事を云った。「君が来てくれてから、前任者の時代よりも成績がよくあがって、校長も大いにいい人を得たと喜んでいるので——どうか学校でも信頼しているのだから、そのつもりで勉強していただきたい」

「へえ、そうですか、勉強って今より勉強は出来ませんが——」

「今のくらいで充分です。ただ先だってお話しした事ですね、あれを忘れずにいて下さればいいのです」

「下宿の世話なんかするものあ剣呑だという事ですか」

「そう露骨に云うと、意味もない事になるが——まあ善いさ——精神は君にもよく通じている事と思うから。そこで君が今のように出精して下されば、学校の方でも、ちゃんと見ていんだから、もう少しして都合さえつけば、待遇の事も多少はどうにかなるだろうと思うんですがね」

「へえ、^{ほうきゅう}俸給ですか。俸給なんかどうでもいいんですが、^あ上がれば上がった方がいいですね」

「それで ^{さいわ} 幸い今度 ^{こんど} 転任者が一人出来るから——^{ひとり} もっとも ^{こうちょう} 校長に ^{そうだん} 相談してみないと ^{むろん} 無論受け合えない事だが——^あ その ^{ほうきゅう} 俸給から ^{すこ} 少しは ^{ゆうずう} 融通が出来るかも知れないから、^し それで ^{つごう} 都合をつけるように ^{はな} 校長に ^{おも} 話してみようと思っうんですがね」

「^{ありがと} どうも難有う。だれが転任するんですか」

「もう ^{はっぴょう} 発表になるから ^さ 話しても ^{つか} 差し支えないでしょう。 ^{じつ} 実 ^{こがくん} は古賀君です」

「古賀さんは、^{ひと} だってこの人じゃありませんか」

「^じ この地の人ですが、^{はんぶん} 少し都合があつて——^{とうにん} 半分は ^{きぼう} 当人の希望です」

「^ゆ どこへ行くんです」

「^{ひゆうが} 日向の ^{のべおか} 延岡で——^{とち} 土地が ^{いっきゅうほうあが} 土地だから一級俸上つて行く事になりました」

「^{だれ} 誰 ^{かわ} かわ ^く 代りが来るんですか」

「^{たいていき} 代りも大抵極まってるんです。その代りの ^{ぐあい} 具合 ^{きみ} で君の ^{たいぐうじょう} 待遇上 ^の 都合もつくんです」

「^{けっこう} はあ、結構です。しかし ^{むり} 無理に ^{かま} 上がらないでも構いません」

「^{かく} とも ^{ぼく} 角も僕は校長に話すつもりです。それで校長も ^{どういけん} 同意見らしいが、^お 追つては君にもっと ^{はたら} 働いて ^{いた} 頂だかなくつてはならんようになるかも知れないから、^{いま} どうか今からそのつもりで ^{かくご} 覚悟をしてやってもらいたいですね」

「^{じかん} 今より時間でも ^ま 増すんですか」

「^へ いいえ、時間は今より減るかも知れませんが——」

「^{みょう} 時間が減つて、もっと働くんですか、妙だな」

「ちょっと聞くと妙だが、——判然とは今言いにくいが——まあつまり、君にもっと重大な責任を持ってもらうかも知れないという意味なんです」

おれには一向分らない。今より重大な責任と云えば、数学の主任だろうが、主任は山嵐だから、やっこさんなかなか辞職する気遣いはない。それに、生徒の人望があるから転任や免職は学校の得策であるまい。赤シャツの談話はいつでも要領を得ない。要領を得なくつても用事はこれで済んだ。それから少し雑談をしているうちに、うらなり君の送別会をやる事や、ついてはおれが酒を飲むかと云う問や、うらなり先生は君子で愛すべき人だと云う事や——赤シャツはいろいろ弁じた。しまいには話をかえて君俳句をやりませんかと来たから、こいつは大変だと思って、俳句はやりません、さようならと、そこそこに帰って来た。発句は芭蕉か髪結床の親方のやるもんだ。数学の先生が朝顔やに釣瓶をとられてたまるものか。

帰ってうんと考え込んだ。世間には随分気の知れない男が居る。家屋敷はもちろん、勤める学校に不足のない故郷がいやになったからと云って、知らぬ他国へ苦勞を求めに出る。それも花の都の電車が通ってる所なら、まだしもだが、日向の延岡とは何の事だ。おれは船つきのいいここへ来てさえ、一ヶ月立たないうちにもう帰りたくなった。延岡と云えば山のなかも山の中も大変な山の中だ。赤シャツの云うところによると船から上がって、一日馬車へ乗って、宮崎へ行って、宮崎からまた一日車へ乗らなくっては着けないそうだ。名前を聞いてさえ、開けた所とは思えない。猿と人とが半々に住んでるような気がする。いかに聖人のうらなり君だって、好んで猿の相手になりたくもないだろうに、何という物数奇だ。

ところへあいかわらず婆さんが夕食を運んで出る。今日もまた芋ですかいと聞いてみたら、いえ今日はお豆腐ぞなもしと云った。どっちにしたって似たものだ。

「お婆さん古賀さんは日向へ行くそうですね」

「ほん当にお気の毒じゃな、もし」

「お気の毒だって、好んで行くんなら仕方がないですね」

「好んで行くて、誰がぞなもし」

「誰がぞなもして、^{とうにん}当人がさ。^{せんせい}古賀先生が物数奇に行くんじゃないありませんか」

「そりゃあなた、^{おおちが}大違いの^{かんごろう}勘五郎ぞなもし」

「勘五郎かね。だって^{いま}今赤シャツがそう云いましたぜ。それが勘五郎なら赤シャツは嘘つきの^{ほらえもん}法螺右衛門だ」

「^{きょうとう}教頭さんが、そうお云いるのはもつともじゃが、古賀さんのお^い往きともないのももつともぞなもし」

「そんなら^{りょうほう}両方もつともなんですね。お婆さんは^{こうへい}公平でいい。一体^{いったい}どういう^{わけ}訳なんですか」

「今朝古賀のお^{かあ}母さんが^み見えて、だんだん^{はな}訳をお話したかなもし」

「どんな訳をお話したんです」

「あそこもお父さんがお亡くなりしてから、あたし達が^{たち}思うほど^{おも}暮し向が^{くら}豊^{むき}かになうてお困り^{こま}じゃけれ、お母さんが^{こうちょう}校長さんにお頼^{たの}みて、もう四年も勤めているものじゃけれ、どうぞ^{まいつきいただ}毎月頂^{すこ}くものを、今少し^{すこ}ふやしておくれんかてて、あなた」

「なるほど」

「^{こうちょう}校長さんが、ようまあ^{かんが}考^いえてみとこうとお云いたげな。それでお母さんも^{かあ}安心^{あんしん}して、今^{いま}に^{ぞうきゅう}増^{さた}給のご沙汰があるぞ、今^{こんげつ}月か来^{らいげつ}月かと^{くび}首を^{なが}長くして^ま待^まっておいでたところへ、校長さんが^きちょっと^{こが}来てくれと古賀さんにお云いるけれ、行^いってみると、^き気^{どく}の^{どく}毒^{がっこう}だが^{かね}学校は^た金^たが^{たり}足り^{たり}んけれ、^{げつきゅう}月^あ給^{わけ}を^{のべおか}上げる^あ訳^{くち}に^{まいつき}ゆか^{まいつき}ん。しかし^{のべおか}延^あ岡^{くち}になら^{まいつき}空^{まいつき}いた^{まいつき}口^{まいつき}があ^{まいつき}って、そ^{まいつき}ち^{まいつき}なら^{まいつき}毎^{まいつき}月^{まいつき}五^{まいつき}円^{まいつき}余^{まいつき}分^{まいつき}にとれるから、^{のぞ}お^{どお}望^{おも}み^{おも}通^{おも}り^{おも}で^{おも}よ^{おも}か^{おも}ら^{おも}う^{おも}と思^{おも}うて、^{おも}その^{おも}手^{おも}続^{おも}き^{おも}に^{おも}した^{おも}から^{おも}行^{おも}く^{おも}が^{おも}え^{おも}え^{おも}と^{おも}云^{おも}わ^{おも}れた^{おも}げ^{おも}な。――」

「じゃ^{そうだん}相^{そうだん}談^{そうだん}じゃない、^{めいれい}命^{めいれい}令^{めいれい}じゃありませんか」

「さよよ。古賀さんはよそへ行^まって^ま月^ま給^まが^ま増^ます^まより、^{もと}元^{もと}の^{もと}ま^{もと}ま^{もと}でも^{もと}え^{もと}え^{もと}から、^おこ^おこ^おに^お居^おり^おた^おい^お。屋^{やしき}敷^{やしき}も^{やしき}ある^{やしき}し、^{はは}母^{はは}も^{はは}ある^{はは}から^{はは}と^{はは}お^{はは}頼^{はは}み^{はは}た^{はは}けれ^{はは}ども、^{たの}もう^{たの}そ^{たの}う^{たの}極^{たの}め^{たの}た^{たの}あ^{たの}と^{たの}で、^か古^か賀^かさん^かの^か代^かり^かは^か出^か来^かて^かい^かる^かけれ^か仕^か方^かが^かない^かと^か校^か長^かが^かお^か云^かい^かた^かげ^かな」

「へん人を馬鹿にしてら、面白くもない。じゃ古賀さんは行く気はないんですね。どうれで変だと思った。五円ぐらい上がったって、あんな山の中へ猿のお相手をしに行く唐変木はまずないからね」

「唐変木で、先生なんぞなもし」

「何でもいいでさあ、——全く赤シャツの作略だね。よくない仕打だ。まるで欺撃ですね。それでおれの月給を上げるなんて、不都合な事があるものか。上げてやるったって、誰が上がってやるものか」

「先生は月給がお上りるのかなもし」

「上げてやるって云うから、断わろうと思うんです」

「何で、お断わりるのぞなもし」

「何でもお断わりだ。お婆さん、あの赤シャツは馬鹿ですぜ。卑怯でさあ」

「卑怯でもあんた、月給を上げておくれたら、大人しく頂いておく方が得ぞなもし。若いうちはよく腹の立つものじゃが、年をとってから考えると、も少しの我慢じゃあったのに惜しい事をした。腹立てたためにこないな損をしたと悔むのが当り前じゃけれ、お婆の言う事をきいて、赤シャツさんが月給をあげてやろとお言いたら、難有うと受けておおきなさいや」

「年寄の癖に余計な世話を焼かなくってもいい。おれの月給は上がろうと下がろうとおれの月給だ」

婆さんはだまって引き込んだ。爺さんは呑気な声を出して謡をうたってる。謡というものは読んでわかる所を、やにむずかしい節をつけて、わざと分らなくする術だろう。あんな者を毎晩飽きずに唸る爺さんの気が知れない。おれは謡どころの騒ぎじゃない。月給を上げてやろうと云うから、別段欲しくもなかったが、入らない金を余しておくのももったいないと思っ、よろしいと承知したのだが、転任したくないものを無理に転任させてその男の月給の上前を跳ねるなんて不人情な事が出来るものか。当人がもとの通りでいいと云うのにのべおかくんだ延岡下りまで落ちさせるとは一体どう云う了見だろう。太宰権帥でさえ博多近辺で落ち

ついたものだ。河合又五郎^{かあいまたごろう}だって相良^{さがら}でとまってるじゃないか。とにかく赤^{あか}シャツの所^いへ行って断^{こと}わって来^こなくちあ^き気が済^すまない。

小倉^{こくら}の袴^{はかま}をつけてまた出^で掛^かけた。大きな玄関^{おおげんかん}へ突^つ立^たって頼^{たの}むと云^いうと、また例^{れい}の弟^{おとうと}が取^{とり}次^{つぎ}に出^でて来^きた。おれの顔^{かお}を見てまた来^きたかとい^いう眼^め付^{つき}をした。用^{よう}があれば二^に度^どだ^だって三^{さん}度^どだ^だって来^きる。よる夜^よなかだ^だって叩^{たた}き起^{おこ}さないとは限^{かぎ}らない。教^{きょう}頭^{とう}の所^{ところ}へご機^き嫌^{げん}伺^{かが}いにくるよ^ようなおれと見^み損^{そく}ってるか。これでも月^げ給^{つき}が入^いらないから返^{かえ}しに^{きた}来^{いま}んだ。すると弟^いが今^{いま}来^{いま}客^{きやく}中^{ちゆう}だと云^いうから、玄関^{げんかん}でい^いからちよ^{ちよ}っとお目^めにかか^かりた^{たい}と云^いったら奥^{おく}へ引^ひき込^こんだ。足^{あし}元^{もと}を見^みると、畳^{たた}付^{みつ}きの薄^{うす}っぺらな、のめ^こりの駒^{こま}下^げ駄^たがある。奥^{おく}でもう万^{ばん}歳^{ざい}ですよと云^いう声^{こゑ}が聞^きえる。お客^{きやく}とは野^のだだ^だなと気^きがついた。野^のだで^でなくて^は、あんな黄^{きいろ}色^{いろ}い声^{こゑ}を出^いして、こんな芸^{げい}人^{にん}じみ^はた下^げ駄^たを穿^はくもの^はない。

しばらくすると、赤^{あか}シャツがラン^{らん}プ^ぷを持^もって玄^{げん}関^{かん}まで出^でて来^きて、まあ上^あがり^りたま^まえ、外^{ほか}の人^{ひと}じゃない吉^よ川^{しかわ}君^{くん}だ、と云^いうから、い^いえこ^こでた^たく^くさん^{さん}です。ちよ^{ちよ}っ^と話^はせ^せばい^いい^いん^んです、と云^いって、赤^{あか}シャツの顔^{かお}を見^みると金^{きん}時^{とき}のよ^よう^うだ。野^のだ公^{こう}と一^{いっ}杯^{ぱい}飲^のんで^ると見^みえる。

「さ^さっ^さき^き僕^{ぼく}の月^げ給^{つき}を^あ上^あげ^てや^やる^らとい^いうお話^わで^した^が、少^すし^し考^{かん}え^が変^かった^こから断^{こと}わり^に来^きた^んです」

赤^{あか}シャツはラン^{らん}プ^ぷを前^まへ出^でして、奥^{おく}の方^{ほう}からおれ^の顔^なを眺^{なが}めた^が、とっ^とさ^さの場^ば合^あ返^{へん}事^じを^しか^かね^て茫^{ぼう}然^{ぜん}として^いる。増^{ぞう}給^{きゅう}を断^やつ^よわ^なる^な奴^{ひとり}が世^との中^{ちゆう}に^だた^きった^ふ一^{しん}人^{おも}飛^とび^お出^もして^たの^を不^ふ審^{しん}に^おも^った^のか、断^いま^かえ^える^にし^ても、今^{いま}帰^{かえ}った^ばか^りで、す^すぐ^で出^で直^{なお}して^こな^くつ^ても^よさ^さう^なもの^だと、呆^あき^かえ^え返^{かえ}った^のか、ま^また^は双^{そう}方^{ほう}合^がっ^ぱい^いした^のか、妙^{みょう}な^{くち}口^{くち}を^つして^た突^つ立^たった^まま^まである。

「あ^あの時^{とき}承^{しょう}知^ちした^のは、古^こ賀^が君^{くん}が自^じ分^{ぶん}の希^き望^{ぼう}で^{てん}に^ん転^{てん}任^{にん}する^{とい}う話^わで^した^から^で.....」

「古^こ賀^が君^{くん}は^まつ^た全^{ぜん}く^な自^じ分^{ぶん}の希^き望^{ぼう}で^な半^{はん}ば^ば転^{てん}任^{にん}する^んです」

「そ^そう^うじ^じゃ^あない^いん^んです、こ^ここ^こに^い居^いたい^いん^んです。元^{もと}の月^げ給^{つき}でも^きい^いい^いから、郷^{きょう}里^りに^居たい^いの^のです」

「君^{きみ}は古^こ賀^が君^{くん}から、そ^そう^う聞^きいた^のです^か」

「そ^そり^りや当^{とう}人^{にん}から、聞^きいた^んじ^じゃ^あり^りま^ません」

「じゃ誰だれからお聞きです」

「僕げしゆくの下宿ばあの婆さんが、古賀かさんのおお母さんきょうから聞いたのを今日僕に話したのです」

「じゃ、下宿の婆さんがそう云ったのですね」

「まあそうです」

「それは失礼しつれいながら少し違ちがうでしょう。あなたのおおっしやるとお通りだと、下宿屋げしゆくやの婆さんの云う事ことは信しんずるが、教頭きょうとうの云う事は信しんじないと云うように聞えるが、そういう意味いみに解かい釈しゃくして差支さしつかえないでしょうか」

おれはちょっと困こまった。文学士ぶんがくしなんてものはやっぱりえらいものだ。妙みょうな所ところへこだわって、ねちねち押し寄おせてくる。おれはよく親父おやじから貴様きさまはそそっかしくて駄目だめだ駄目だめだと云われたが、なるほど少しょう々しょうそそっかしいようだ。婆ばあさんの話はなしを聞きいてはっと思おもって飛とび出だして来きたが、実じつはうらなり君くんにもうらなりのおお母さんかにも逢あって詳くわしい事情じじょうは聞きいてみなかったのだ。だからこう文学士りゅうき流りゅうに斬きり付つけられると、ちょっと受うけ留とめににくい。

正しょう面めんからは受うけ留とめににくいが、おれはもう赤あかシャツたいに対たいして不ふ信しんを心こころの中うちで申もうし渡わたしてしまった。下宿げしゆくの婆ばあさんぼうもけちん坊よくばの欲張やり屋そういに相違うそないが、嘘うそは吐つかない女おんなだ、赤あかシャツたいのように裏うら表おもてはない。おれは仕方しかたがないから、こう答こたえた。

「あなたの云う事ことは本ほん当とうかも知しれないですが——とにか増ぞう給きゅうはご免めん蒙こうむります」

「それはますます可笑おかしい。今いま君きみがわいざわいざわお出いでになつたのは増ぞう俸ほうを受うけるには忍しのびない、理り由ゆを見出みしたからのように聞きえたが、その理り由ゆが僕ぼくの説せつ明めいで取とり去さられたにもかかかわらず増ぞう俸ほうを否いなまれるのは少すこし解かいしかねるようですね」

「解かいしかねるかも知しれませんがね。とにか断ことわりますよ」

「そんなに否いやなら強しいてとまでは云いいませんが、そう二に三さん時じかん間のうちとくべつに、特とく別べつの理り由ゆもないのひょうへんに豹ひょう変へんしちや、将しょう来らい君しんようの信しん用ようにかかわる」

「かかわっても構かまわないです」

「そんな事はないはずですが、人間に信用ほど大切なものはありませんよ。よしんば今一歩譲って、下宿の主人が……」

「主人じゃない、婆さんです」

「どちらでもよろしい。下宿の婆さんが君に話した事を事実としたところで、君の増給は古賀君の所得を削って得たものではないでしょう。古賀君は延岡へ行かれる。その代りがくる。その代りが古賀君よりも多少低給で来てくれる。その剰余を君に廻わすと云うのだから、君は誰にも気の毒がる必要はないはずですが。古賀君は延岡でただ今よりも榮進される。新任者は最初からの約束で安くくる。それで君が上がられれば、これほど都合のいい事はないと思うのですがね。いやなら否でもいいが、もう一返うちでよく考えてみませんか」

おれの頭はあまりえらくないのだから、いつもなら、相手がこういう巧妙な弁舌を揮えば、おやそうかな、それじゃ、おれが間違ってたと恐れ入って引きさがるのだけれども、今夜はそうは行かない。ここへ来た最初から赤シャツは何だか虫が好かなかった。途中で親切なおんなみたような男だと思ひ返した事はあるが、それが親切でも何でもなさそうなので、反動の結果今じゃよっぽど厭になっている。だから先がどれほどうまく論理的に弁論を遅くしようとも、堂々たる教頭流におれを遣り込めようとも、そんな事は構わない。議論のいい人が善人とはきまらない。遣り込められる方が悪人とは限らない。表向きは赤シャツの方が重々もつともだが、表向きがいくら立派だって、腹の中まで惚れさせる訳には行かない。金や威力や理屈で人間の心を買える者なら、高利貸でも巡査でも大学教授でも一番人に好かれなくてはならない。中学の教頭ぐらいな論法でおれの心がどう動くものか。人間は好き嫌いで働くものだ。論法で働くものじゃない。

「あなたの云う事はもっともですが、僕は増給がいやになったんですから、まあ断わります。考えたって同じ事です。さようなら」と云いすてて門を出た。頭の上には天の川が一筋かかっている。